



さくらの夜エンドロールの微熱かな
雲雀野にグラランド・ピアノ置きたかり
サーファアの尻に見惚るる春の逗子
滴りや秩父へ抜ける風の筋
散る桜産みたて卵感電す
失せ植のためのひと日といふがあり
少年に鞆しの匂ひ夏に入る
春潮を大きく吸って吐く礁
春夕焼岬に溶岩のよみがへる
夜は星の色となりたる花林檎
雪解靄阿仁は熊魂濃きところ
木の芽どき足もと暗き水族館
滴りの一滴星の欠けらとも
五月来る水は田越の千枚田

*

関 千賀子
矢島 恵
栗原利代子
古畑恒雄
川村五子
米山節子
黒沢孝子
中里 結
清水道径
石田経治
山田一政
海野恵子
百瀬石涛子
畦上文子

満里子・勝也黄砂となりて帰りしか
美青年のヨガ教室や青葉騒
逝く友やつつと寄りあふ花筏
薬や切株嘗て断頭台
大鍋にひじき炊かるる葉山かな
星涼しかり晩節を汚すなよ
鳥獣隙なく生きて春みじか
結葉や切抜き帳とことば館
余熱をさます暮春の登り窯
浅間山細くなりしや鯉幟
兄の死や雪積むごとく花すもも
縹渺と空を拡げて鳥帰る
初螢卑弥呼の使ひやも知れず
梯梧散る与那国馬の草競馬
握りみて修羅場やつれよ罔鮎
木障伐の亡き魂を捜すごと

渡辺真帆
竹村慶子
西牧千恵子
樋上照男
島田葉月
鈴木湖愁
高田 実
荒川美恵
吉池史江
勝山宗章
大澤淳基
堀内ただを
垣内みか
渡嘉敷皓駄
小林道明
五味真穂

岳俳句・拓くことば 七月

(455)

宮坂 静生

はじめに。微妙に人の気持は伝わるものだ。とはいえ、微妙さばかりに気を使うと大きな仕事はできない。しかし、微妙さは立ち止まり情緒を味わう停滞ではなく、新たに創り出す積極さの中で感じられるものに魅力がある。

サーファーの尻に見惚れる新鮮なエロス

サーファーの尻に見惚れる春の逗子 栗原利代子

かっこいい。現代っ子利代子さんのことばの切れのよさを讃えたい。ズバリ「尻に見惚れる」が明快。イメージが先行し、「尻」の意味も明るく、肯定的に新味が出されている。陰湿ではない。春の逗子がいちだと躍動感ある地に見直された。

雲雀野にグランド・ピアノ置きたかり 矢島 恵

結構がいきいきしている。文字通り「グランド・ピアノ」。落語ではないが、まじめなおかしみがある。世界の雲雀の大集合によって一大オーケストラの演奏がはじまるか。さすがの美空ひばりもこれにはたまげるであろう。

滴りや秩父へ抜ける風の筋 古畑 恒雄

春潮を大きく吸って吐く礁 中里 結

春潮が体当たりする礁の躍動的な存在感を大きな呼吸として捉えたところに共感する。夏の青葉潮や葉月潮ではなく、春潮なのがういういしい。自然界の一生懸命なさまが春の潮にもまれる礁のさまから伝わる。

春夕焼岬に溶岩のよみがへる 清水 道徑

いたるところに火山のある日本列島はどこでも溶岩がごろごろしている。火山流のその先端は岬。春の夕焼を背景に、るいいるいと重畳な溶岩は潮に洗われ、いのちを取り戻したような生気をみせている。地味な句であるが、骨格たしかな

今月の秀句

さくらの夜エンドロールの微熱かな 関 千賀子

映画のスクリーンやテレビドラマの最後などに流れる字幕がエンドロール。「微熱」に視聴者の余韻が巧みに捉えられている。折から花の夜もいっそう雰囲気盛り上げて嬉しい。知と情とのバランスの取り方が上手な作者。さりげなく事をすすめて的確。淡泊でもなし、逆に激情に走ることもない。情の深い人にありがちな、熱し易く冷め易いタイプとも違う。まさにエンドロールの微熱を持った人だ。

甲武信岳あたりの滴りか。山中の風の筋こそ、自然の営みの琴線にあたる急所。山また山の秩父。山中は古来、智恵が生まれるところでもあるう。透徹した一句。

散る桜産みたて卵感電す 川村 五子

一句に動きがある。落花の中で今産み落されたばかりの卵に触れ、ぴりっと感電した物体感を持った。瞬時の感覚のひらめきを上手に句にしたスピード感が快い。「散る桜」の季語の働きが大きい。直観の着想に鋭さが出されている。

失せ植のためのひと日といふがあり 米山 節子

「失せ植」が越後方言か、珍しい。浮苗などで、田植後、活着のよくない田に補植をすることか。いかにも米どころらしい習俗のことばがあるものと心動かされた。大百姓家の女主節子さんの佳吟と思う。

少年に鞆しの句ひ夏に入る 黒沢 孝子

「鞆し」は鞆し皮の意。少年が青年になりかける年頃、その野性味ある体臭はどこか動物の鞆し皮の匂いを発散する。夏は身体もいっそう自然に反応し易いとき。的確な作。

作。

夜は星の色となりたる花林檎 石田 経治

林檎の花が咲く時期は天と地が息を通わせ、その間の生き物たちはわが世の春を謳歌する。星空の下、林檎の花はうっとりと夢みる。寒冷地の花だけに気性のほげしさを秘め、透明感をもった花片を「星の色」とみた点も頷かれよう。

雪解靄阿仁は熊魂濃きところ 山田 一政

春の出熊猟のさかんな秋田山中のマガギの村阿仁。秋田県の二千頭ほどの熊の半数はこの地に棲息する由。雪解靄が立ち、出熊猟のため、いのちを差し出す熊もいる。「熊魂」が濃いとこのいい方に迫力がある。雪解靄ひとつでも、秋田阿仁のそれと信州の靄とは違う。地貌の違いが滲む。熊の魂が溶け込んでいる雪解靄の厚みを想像し、胸うたれる。

木の芽どき足もと暗き水族館 海野 恵子

水槽の照明を中心に考えられ、水族館の内部は湿りを持ちうす暗い。外界は木の芽どきの明るさ。場面の対比があざやか。些細な点に気付き、一気に句が立体化された佳吟。

滴りの一滴星の欠けらとも 百瀬石湊子

日本の山中の滴りではなく、シベリアの大地での貴重な滴りのような大いさを「星の欠けら」から想像する。こゝでも、地貌が違えば同じ滴りでも異なる感触が詠われる。

拓くゝんば ③④ 自句寸言(14)「春の鳶」

みひらきし眼に雲を出て春の鳶 昭和47年

「鷹」(昭和四十七年六月号) 作品一欄所載。鈴木青泉、四月十四日逝去、享年六十八。追悼句。下諏訪駅前の富士見町在住の「鷹」幹部同人で、親交があった。静岡県小笠郡佐束村生れ、東京へ出てメリヤス織の技術者となり、昭和十六年から下諏訪に移住。諏訪湖の釣と出湯と俳句を愛した野人。投宿し、俳論をやった。座光寺亭人とともに苦勞で磨きあげた人格が人を惹きつけた。旧派の俳諧に馴染んだ骨太な句風であり、「鷹」では飯島晴子信奉者で俳味に独自さがある。『鈴木青泉句集』上梓のお手伝いをした。掲句は安曇野での作。湘子絶賛句。『山開』所収。

雉子翔ちてひとすぢの紺亡びけり 昭和48年

「鷹」(昭和四十八年八月号) 所載。「信濃追分」とある。佐久へ赴任以来十余年通い詰め、半生で一番惹かれた場所か。旅宿油屋の横を上がり、千メートル林道での囁目吟。これで一区切りという気持があった。未完の詩人立原道造を「風の系譜」と題し素描したのが十年前(研究誌「可里婆禰」第二号、『雪』そして虚空)所収。この模糊とした抒情から離れたいと意識した。『山開』

所収。

みなそこの四葩あかりにゆきしかな 昭和48年

「鷹」(昭和四十八年九月号) 所載。「中澤政幸の死」とある。小学校、中学校と同級生。住居が近く、親友だった。松本県陵を出て父の稼業スワンクリーニングを継いだ。滅法働きの者で稼業を大きくしたが、夜中に心筋梗塞でぼっくり死んだ。三十六歳。幼子二人残して。あんな几帳面で真面目ない男はなかった。水底に紫陽花の薄紫が映る。そこに政幸が微笑んでいる。小学校六年時の林雅博の自殺と彼の死が哀れでならない。彼らの純粹さほど尊いものはない。死んだ彼らに比べたら僕は墮落しただけだと、いつも生きる原点に彼らがいる。『山開』所収。

子と谷地へ一と日七節虫草色に 昭和48年

「鷹」(昭和四十八年十月号) 所載。珍しく長男(五歳)、次男(四歳)を連れて、秋口に裏山の谷地牛伏寺川へ遊びに行った。長男が木の枝のような虫を持ってきた。十センチほど。節が六節、細い脚が六本。これが直翅類ナナフシ目の昆虫で七節虫。ぞっとした。子に教えられた虫で、後年にも同じ寺で「七節虫の六節如意輪観世音」と詠んだ。牧の寺で、わが句材の宝庫。『山開』所収。

五月来る水は田越の千枚田 畦上 文子

姨捨辺の千枚田へ水が入る。上の田から順に水が入るさまを「田越」の表現を用いた点に、土地の人の常用のことばへの愛情や拡がりを感じられ、一句は俄然生きる。

次に雪嶺集、前山集から推薦候補作を掲げる。

散りつくしたる紅梅の火照りなほ	国見 敏子
椿落ちひととき草をねむらせ	田中 純子
声立てぬものばかりなり蜘蛛の国	佐藤 健
布で濾す漆八十八夜かな	田川 節子
若菜光これが寂しさてふことか	市川美八子
霾れり身内に霾のごときもの	辰野 利彦

美青年のヨガ教室のじんわりした情緒

美青年のヨガ教室や青葉騒 竹村 慶子

眠っていた獅子ほどではないが、ようやく動きはじめた作者に注目したい。欲がなくて、適当におつき合いといった程度の俳句への態度がなまぬるかった。掲句、「青葉騒」と置き、美青年のヨガ教室へ通う作者の動悸をおさえた期待が一句を生きたものになっている。優等生俳句ばかり並べてきた作者の率のなさには迫力が感じられなかった。句に生氣が足りなかったのである。こゝに来て、生身の俳句が出されるようになった。つづけて大胆な作を示してほしい。

逝く友やつつと寄りあふ花筏 西牧千恵子

追悼句として思いが深い。努力家の作者。精一杯生きていく。毎月はっと思わせる、心に触れる本音が詠まれており、句幅も広い。体験が一句の裏うちとなってよく昇華されていると思う。地味な作り方をするのが好調の印。

薬や切株嘗て断頭台 樋上 照男

原始時代を思わせる素朴な野性がある。大きな木の切株に罪人を立たせて処刑するという。そんな時代があった。いまは薬が生え時も移り平和な時代となっているが、太古の林中、原っぱではこんな光景が見られたというのであろう。句集『丸太小屋』の評判上々。身辺にある切株からの着想に歴史の重い時間が加わり、連想が拡がったものか。

大鍋にひじき炊かるる葉山かな 島田 葉月

別荘地葉山の田舎風景に力が入り、海辺の日常が捉えられた。地貌の内側へ入り、住人の暮らしの質素なさまを描いたのがよかった。風景句にも作者の地貌観が出ている。

星涼しかり晩節を汚すなよ 鈴木 湖愁

病果処理の後、ひたちなか市の自宅から移住されたと同じ。いよいよ晩節、どう生きるのか、夏の星空を仰ぎ、気分をなだめているさまがよくわかる。きびしい生き方をしてき

た人。

鳥獸とりけものすゑ隙すきなく生きて春はるみじか 高田 実

春になって鳥獸界の生存競争のはげしさを「隙なく生きて」と捉えた。人間の日常とは違う命がけの世界が生物界。人間のなまめるい生き方を省みたものか。

結葉むすひばや切抜ききりぬ帳ちやうとことば館かん 荒川 美恵

大岡信が四月五日死去。八十六歳。三島駅の隣接地に大岡信ことは館がある。私も親しいところで、掲句への共感夏は夏の「結葉」を配した巧みにある。大岡さんには格別のお世話を頂戴した思いがつよい。『語りかける季語 ゆるやかな日本』を讀賣文学賞へ強力に推してくださったのも思い出の一つ。安東次男さんが昭和四十七年（一九七二）五月に大岡さんを紹介してくださって以来四十五年にわたる。六月二十八日明治大学のホールでの追悼会には出たいと思う。ことばとことば、ことばとひと、人と人とを結ぶ名人でもあった。

余熱よねつをさます暮春ぼしゆんの登り窯のぼり 吉池 史江

どんな傑作がとび出すか、窯を開けるまでのときめきを上手に捉えている。「余熱をさます」と「暮春」、ことがらと時候の取り合せにたいへん詩情がある。

浅間山あさま細ほそくなりしや鯉こい幟のぼり 勝山 宗章

うれしかった。あれが「卑弥呼の使ひ」か。地貌の違いが螢にも出ている。

梯梧ていご散るち与那国馬やなぐにうまの草競馬くさけいば 渡嘉敷皓駄

草競馬を沖繩では「シマハラシー」という。琉球王朝時代から約五百年の伝統があったが太平洋戦争で途絶え、昨年七十年ぶりに復活したという。三頭の馬が百メートルのコースを「側対歩そくたいほ」（駆け足ではなく、同じ側の前脚と後脚とを同時に出す走法で、美しさトリズムの正確さを競うもの）で走り、競い合う。梯梧の花が散る夏、与那国馬（ど・う・なんの馬）の草競馬がきらびやかな衣装をまとった騎手の手綱さば

今月の秀句

満里子・勝也みさとかつや黄砂こうさとなりて帰かえりしか 渡辺 真帆

〈鳥林屯に眠るはらから霰うりんとんれり〉も同時作。まぼろしの国満州の土に果てた満里子・勝也。その名も往年の盛時を思わせる。大陸の黄砂となり日本本土を訪れるとはなんと切ないことか。真帆さんものち一つ辛うじて両親の庇護のもとに帰国したと仄聞する。侵略の野望のもとに犠牲となった民を思えば、胸が張り裂ける思いだ。亡き子たちを忘れないで語り続けたい。幽魂ゆうこんのはらからよ、あなたたちを忘れない。

しばらくぶりで浅間山をながめた主人公の感慨。五月の浅間山が春の膨らんだ感じから緊まった山容に変わった。これが触発された着想のきっかけであろうが、久しく故郷をはなれていて、仰ぎみた山への思いも托されているであろうか。伊勢原から佐久望月の地へ帰られての作者。奥方節子さんが逝った後も俳句を続けられ、今月号は拔群の出来に瞠目した。

兄あにの死しや雪積ゆきつむごとく花はなすもも 大澤 淳基

比喩が美しくも哀しい。一句のことばのリズムは、上句母韻へa i oの荘重な出だし、中句へu oの沈潜、下句へa u oと明るめに納める。追慕の思いが、選ばれたことばに見事に托されている。

縹渺ひょうみやうと空そらを拡ひろげて鳥帰とりかえる 堀内ただを

はるかかなたへ飛翔する春の渡り鳥詠として内容は当然のことであるが、「縹渺と空を拡げて」のことばの用い方にうっとりする美しさがある。ときにことばが美しすぎる感じもあるうが、こゝにもう一つ、帰る鳥への個性的な見方が加わることを期待する。

初螢卑弥呼はつぼたるひみこの使つかひやも知れず 垣内 みか

想像がおもしろい。大粒な四国四万十の螢をふと思った。先年、四万十へ伺った折、螢狩に連れて行って貰った。信州辺の螢よりも人なつこく、菜殻を束ねた帚によくかかるのが

きで開かれる。作者から沖繩こどもの国での写真を送って貰った。馬は県の天然記念物の由。鄙びた絵巻物のようだ。

握にぎりみて修羅場しゆらばやつれよ四鮎せうあゆ 小林 道明

よく考えて作られた句だ。上中下のことはの組み合わせ、イメージも意味も完璧に近い。四鮎の切なさが芝居の役者風情を思わせる見事な擬人化表現で描かれ、うっとりする。

木障伐こさきの亡なき魂たましいを捜さがすこと 五味 真穂

「木障伐」（こさぎり）とは夏の枝下ろしのこと。全国に通用する山仕事ことば。凝った句と思う。山中の杉や檜の枝下ろしは亡き人の魂のあり処を捜しているようだという。木の茂みに隠れているとも思っているのであろうか。山人の逝った直後などそんな漠然たるふしぎさはある。

次に岳集推薦候補作を掲げる。

行く春はるや鳥とりの頭蓋とうがいさくら色いろ 坂田 寿美
春はるの海霧うみぎりアイヌモシリをひと巡めぐり 横地 妙子
蝶々ちょうちょうや少年しょうねんの眼めは水の精せい 曽根原幾子
ながらへて土つちと化かすまで薯いも植うえる 円城寺 龍
金目鯛きんめだい間の光ひかりを一身いつしんに 千田 幸子
この子等こらのための憲法記念けいぽうきねんの日ひ 鈴木 臣和
さへづりや教おしへたがりの人ひとばかり 折井 眞琴
夏立なつたちぬ青あおき地球ちきゅうの千枚田せんまいだ 穂苅 真泉